襞のあわい――その火口（ほくち）⑬

天理大学人間学部教授
松田　健三郎　*Kensaburo Matsuda*

前稿末尾をここに再録する。

…ヴィトゲンシュタインについていわれることがある――その営為は孤島の汀を辿っているようにもみえながら、その実、無限の大洋のかたちならぬかたちを謎っているのだ、と。ドニジャーの言にしたがえば、レヴィ＝ストロースについても同様の理解が求められる。ことばをくり返せば、神業のごときその異文解析――その精緻が極まれば窮まるほど、その無限の彼方に鉛錘するところ、「自然の与える混沌」が屹立して控えている、にもかかわらず「知的意味を与えようとする弁証法の試み」が人間として…。本稿の題する、「襞のあわいに深く入り込んでいって…」も、また、そこを志向して…。

今回、本稿は襞のあわいに深く入り込んでテーマ「芸術と宗教」を志向することとしよう。

「宗教的人間」に関連して、エリアーデはその著『聖と俗』においてつぎのように付言している。

常に聖なる宇宙のなかに生きようと努めること、その結果、彼の全生活体験は宗教的感情を持たない人、聖なるものを失った世界に生きる人間の体験とは種を異にする。しかし同時にここで言っておきたいことは、全面的に聖なるものを失った世界、全く非聖化された宇宙というものは、人間精神の歴史における新たな発見ということである。[1]

このいわば全面的な非聖化が、近代社会の非宗教的な人間の全体験内容を特徴づけるものであり、かかる非宗教的人間は新しい生存の条件を引き受けたという。人間はみずから自己を創るにいたる、自己自身と世界を非聖化するに応じて――最後の神を殺してしまうまで。

『聖と俗』では、「この哲学的立場を論議することが今の我々の課題ではない」とされ、「近代の非宗教的人間が悲劇的実存を引き受けたこと、彼の実存的選択は決して些少なことではない」とするに止どまる。ただ、この「選択」の反動として、「偽装した神話や堕落した祭式」や「無意識の活動から栄養と援助を受けている」事実、そして「近代人の〈私的神話〉は…もはや存在論の神話にまで高まることはない」との指摘がなされる。

もっとも、数年後にその上梓をみる小論「聖なるものと現代の芸術家」においては、同様の事態にいささかそのニュアンスを異にした見解をエリアーデは示しているようにもおもわれる。

ニーチェが初めて「神の死」を宣言した1880年以降、人々はそれについてあれこれと論じている。[2]

『聖と俗』同様、ここでも哲学者・神学者の論議が課題となるのではない。彼らのものの見方とある対照性をもつとされる現代芸術家がとりあげられる。どちらにとっても、「伝統的な宗教言語、たとえば中世の言語や反宗教改革の言語では、宗教経験を表現することは不可能だ」というのである。事実、現代の芸術家の多くは伝統的な宗教のイメージやシンボリズムに関心を抱いていない。しかし、エリアーデがここに見るのは、「『聖なるもの』が現代芸術から完全に消失してしまった」という事態ではない。「認識不能になっている」、いいかえれば、もはやありきたりの宗教言語で表現されていないので即座には認識できない、「『俗なる』形態、目的、意味のなかに偽装されている」というそれである。

キュビズムからタシスムまでわれわれが目撃しているのは、事物の究極の構造を露にするために、その「表面」から自己を解放し、そのなかに貫入していこうとする芸術家たちの側での必死の努力である。[3]

この「必死の努力」が「偽装」といわれるわけだが、「事物の究極の構造」を「「物質の秘密の様態」ととらえ返し、「石に対するブランクーシの態度」に言及するとき、ある意味、バイアスがかけられてくるかのようでもある。「ブランクーシと神話」の一節――

彼がこの飛翔する上方への衝動を、まさに重さの始原型、あの「物質」の究極形態――すなわち石――を用いて表現することに成功したのは驚くべきことである。ブランクーシが実現したのは、「物質」の変質、あるいはより正確にいえば、反対の一致（*coincidentia oppositorum*）だったと言えよう。[4]

現代芸術家における、この「物質そのものへの徹底した関心」をエリアーデはティヤール・ド・シャルダン、レヴィ＝ストロースそしてフロイトにも見る。（「文化の流行と宗教史」）

さて、フロイトは、芸術家について次のようにいう。

芸術家は、そのスタートにおいて、今にも神経症になりかねない内向者である。芸術家はあまりに強い本能欲求に駆り立てられるのであるが、これらを満足させる現実的手段が欠けている。そこで芸術家は現実を見捨てて、その関心のすべてを空想世界の願望形成に転移する。…芸術家たちが神経症による己が才能の部分障害にいかにしばしば苦しむものであるかは周知の如くである。（『精神分析入門』）

エリアーデも言及した現代芸術の主流といっても過言ではない――キュビズム、その先駆的存在としてセザンヌが、その当否はともかく、しばしば言挙げされる。フロイトの言との関連をたどってみると、たとえば、「セザンヌであることと、分裂病者（統合失調症者）であることとは、同じことである（c'est la même chose …d'être Cézanne et d'être schizoïde）」と。自身のこのことばを、メルロ＝ポンティは「この病気の形而上学的意味合い」を軸として読み解く。セザンヌにおいて、分裂病は「世界を凝結した現れの全体性へ還元し、その表現的価値を留保すること réduction du monde à la totalité des apparences figées et mise en suspens des valeurs expressives」として機能したというのである。[5] しかし、「…還元し、…留保する」とは？

以下次稿――

［註］

（1）エリアーデ，M.『聖と俗』、法政大学出版局、1969年、p.5～6。
（2）同『象徴と芸術の宗教学』、作品社、2005年、p.143。
（3）同上、p.146。
（4）同上、p.171。
（5）メルロ-ポンティ，M.「セザンヌの疑惑」『メルロ-ポンティ・コレクション4』、みすず書房、2002年、p.26。